

聖書：創世記7：1～24

説教題：主はうしろの戸を閉ざされ

日時：2023年4月23日（朝拝）

主は地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になって悔やみ、残念に思われました。主なる神が地をご覧になると、そこは暴虐で満ちており、すべてが墮落していました。そこで神は大洪水によって地をさばこうとされます。しかしそこにただ一人正しい人がいました。それがノアでした。彼が正しい人と言われているのは、先週も見た通り、彼に罪がなかったという意味ではありません。あるいは彼は自分の良い行いによって救いを勝ち取ったという意味でもありません。彼も私たちと同じ罪人の一人です。しかし彼は信仰によって歩んでいました。彼の世代のすべての人が神を無視し、自分の欲望に従って生きていた中、ノアは神を仰ぎ、神との交わりの中で、神に従う歩みをしていました。ですから彼の正しさはその信仰の結果であったということです。このように神とともに歩んだノアとその家族だけが洪水のさばきから救われて行きます。このノアの洪水物語はやがての究極的なさばきの日、最後のさばきの日の予告となるものです。ですから私たちはノアの信仰から学び、ノアと同じ道を行くように、そして救いにあずかる者となるように、この箇所から導かれたいと思います。

さて7章最初の部分は洪水が起こる7日前の主の言葉を記したものです。主は1節でノアにこう言われました。「あなたとあなたの全家は、箱舟に入りなさい。この世代の中であって、あなたがわたしの前に正しいことが分かったからである。」まず注目したいのは「あなたとあなたの全家は」と言われていることです。ノアだけではなく、ノアとともにノアの家族も箱舟に入りなさいと言われている。これは聖書に見られる神の方法です。神は家族を切り離して見ることはしません。ここでその歩みが正しいと言われているのはノア一人だけです。1節後半に「あなたがわたしの前に正しいことが分かったからである」とあります。その一人の信仰者ゆえに、その家族全体も特別な祝福の中に包み込まれる例を私たちはここにも見ます。もちろんこのことは一人が主を信じれば家族も自動的に全員救われるという意味ではありません。エゼキエル書14章14節にはノアとダニエルとヨブの三人の名があげられ、こう言われています。「これら三人の者がいても、彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ——神である主のことば——。」さらに14章20節ではもっとはっきり

こう言われています。「たとえ、そこにノアとダニエルとヨブがいても——わたしは生きています。神である主のことば——彼らは決して息子も娘も救い出すことはできない。彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ。」ここからも究極的には一人一人の信仰が問われることが分かります。しかし今日の箇所にも示されていますように、神は救いのわざを進めるにあたって家族という関係を考慮しておられます。ノアが主の前に正しい人として歩むことによって、ノアの家族も彼の信仰に触れることになりましたし、箱舟建築におそらくともに携わる者とされましたし、やがて自らの意志で箱舟に乗り込み、救われることとなります。これは単に成り行き上、そうなったということではなく、神がこのことを御心とし、そのように働きかけてくださったからであることを私たちは7章1節の主の言葉に見るのです。私たち一人一人が遣わされている家族の中でノアのように生きる時、神は「あなたは」だけでなく、「あなたとあなたの全家は」という視点のもとに恵みを与えてくださることを期待して私たちは主に従って行くことができます。

次に主はきよい動物ときよくない動物に関する指示を与えられます。6章ではすべての生き物を二匹ずつ、雄と雌を箱舟に連れて入るように言われましたが、7章ではより詳しく、きよい動物に関しては七つがいつ取るようにとされています。きよい動物ときよくない動物について規定としてはっきり明示されるのはレビ記にありますが、ノアは神とともに歩む中ですでにこの区別について知っていたのでしょうか。なぜきよい動物が多く取られるかについては、この後ささげものとして用いられるということがありましたし、また洪水後の世界で許される食用のことが考えられていたのでしょうか。そのようなことをしてもその種類が生き残るように、主はこのことをノアに命じられました。主は洪水によって世界をさばこうとしておられますが、ご自身が造られたものを全部投げ捨ててしまおうとしておられるのではなく、むしろ洪水によってこの世界をきよめて良いものとして再び取り戻そうとしておられること、回復しようとなさっていることが分かります。

この命令に対してノアはどうしたでしょう。5節に「ノアは、すべて主が彼に命じられたとおりにした」と記されます。6章22節と同じく一言語られているだけです。余計な言葉が一切つけられていないことの内にノアが完全に、忠実に主に従ったことがかえって強調される形となっています。ここにまさに「主と共に歩んだ」ノア、「正しい人」ノアの姿そのものがあります。そしてここであわせて注目したいのは、その

ようなノアとともにあった主の助けについてです。主が命じた内容は簡単なものだったでしょうか。すべての動物を主が命じられた通り集めることはわずかな人々にとって非常に困難なことであったと思われます。人間の力ではとても引っ張って来れない大きな動物もいます。ところが 8～9 節を見るとどうでしょうか。何と動物たちの方から「雄と雌がつがいになって箱舟の中のノアのところにやって来た」と書かれています。思い起こされるのは 2 章 19 節です。神は動物を形造った後、アダムに名をつけさせるため、それらの生き物を彼のところに連れて来られました。神が連れて来たのです。この 7 章でもそうだったのでしょう。ノアとその家族はその光景に驚き、目を見張ったに違いありません。神はこのように助けてくださる神です。私たちにただ無理難題を押し付け、私たちの力でそれをするようにと言われる方ではありません。命令を与える神は、それができるように私たちを助け、支えてくださる神でもあります。そのことを覚えて、一見難しいと思われる主の命令に対しても、主の助けと導きを期待して従って行く者でありたいと思います。

さて後半はそれから 7 日後、いよいよ大洪水が生じた時のことです。11 節に「大いなる淵の源がことごとく裂け、天の水門が開かれた」とあります。ここに水の出所として二つあったことが分かります。簡単に言えば上からの水と下からの水です。つまりノアの洪水は「天の水門が開かれた」と表現される、上から降った水にだけによるものではないということです。「大いなる淵の源」とは地下にあった水源を指していると思われます。この「淵」と訳されている言葉は創世記 1 章 2 節で、「闇が大水の面の上にあった」と言われているところの「大水」と訳されている言葉と同じです。そして思い起こされるのは創世記 1 章 6～7 節で、神は大空の上にある水と下にある水とを分けられたことです。神はこの二つの水の間には空間を造って生命がそこに存在できるようにされました。しかしこのさばきにおいては上にある水と下にある水が再び一緒になって、いわば最初の混沌とした状態に逆戻りするような状態になったということを示しています。膨大な量の水が地に臨んで、秩序だった創造以前のカオスを思わせるような状態になったのです。

そのことが起こった時、ノアの家族——それは 13 節からノアとノアの三人の息子たち、セム、ハム、ヤフェテ、及びそれぞれの妻たちの計 8 人であったことが分かりますが——と動物たちが、神が命じられた通り、箱舟に入り、乗船完了となったことが記されています。その後で 16 節後半に注目すべきことが書かれています。16 節後

半：「それから、主は彼のうしろの戸を閉ざされた。」 箱舟に入るように言われたものすべてが入った後で最後に入口の戸を閉めたのは主であったと記されています。これは何を物語るものでしょうか。それは何と云ってもこれから起こる大洪水の中、舟の中にいる者たちを守ってくださるのは主であるということです。ノアはゴフェルの木で箱舟を造り、内と外にタールを塗るようにと言われました。これは洪水が木の間から侵入して来ないようにするためです。しかし舟の入口はどうなるでしょう。皆が乗った後、その継ぎ目に内側からタールを塗ることができても外側から塗ることはできません。しかもこれは小さい扉ではなく、大きい動物、象のような動物も入れる大きさのものだったでしょう。激しい洪水に揺さぶられては、果たしてどこまで持つものか、心許ない部分でもあったでしょう。しかしそこを主が閉ざしていただきました。これはとりもなおさず主がそこをしっかりと守ってくださるということを意味したでしょう。これから箱舟の外の世界は恐ろしいことになります。その外で行われるさばきとの間に立って舟の中にある者たちを守ってくださるのは主である。主がこのさばきを無事くぐり抜けられるよう彼らを守ってくださる。

と同時にもう一つのこともこれは意味したと思われます。それは外にいる者たちにとって救いの時は終わりとなったということです。箱舟の入口が開いている間は、中に入ろうと思う人は入ることができました。しかし主がその入口を閉ざしてしまったら、もうそのチャンスはありません。雨が降って来て、これではまずいぞと思っても、もはや手遅れ。急いで箱舟の扉のところまで行ってドンドン叩いてもあけてもらうことはできません。救いのチャンスはそこまで！とされて、その入口が閉ざされる日が来る。そのこともこれは示していると思います。

そうして17節以降に大洪水のさばきの様子が記されます。大雨は12節にあった通り、40日40夜降り続けました。水かさが増したことにより、こんな陸地に船を造ったところで何になる？と人々から馬鹿にされていたであろう箱舟がついに浮き上がります。水はみなぎり、地の上に大いに増したので、箱舟は水面を漂い始めました。水は益々みなぎり、天の下にある高い山々もすべて覆われました。さらにその上15キュビト増し加わり、山々は完全に水没しました。この結果、21節にある通り、「地の上を動き回るすべての肉なるものは、鳥も家畜も獣も地に群がるすべてのものも、またすべての人も死に絶え」ました。生存可能な場所はもはやどこにもありません。その結果、みな死んだということが22節でも23節でも繰り返し述べられ、強調され

ています。箱舟の外の世界に希望は一切ありませんでした。例外はありませんでした。最後の24節に「水は百五十日間、地の上に増し続けた」と記され、このさばきが徹底的なものとして行われたことが強調されています。神は罪をそのままにはされません。例外的にこれを逃れられる人はただの一人もいません。これは将来の最後のさばきを指し示す出来事です。聖なる神は悪をお認めにならず、必ず最後にはこのようなさばきを行われます。その究極的な日が来ることをノアの洪水の出来事は今日の私たちに対して示しています。

一方、このさばきの中でわずかながら救われた者たちもいました。23節後半に「ただノアと、彼とともに箱舟にいたものたちだけが残った」と記されていました。私たちも来たるべきさばきから救われたいと思うなら、このノアたちのようであればならないということになります。今日の箇所でのノアの姿から学んで私たちが自らに適用すべきことは何でしょうか。すでに見て来たことですが、3つのことを確認して終わりたいと思います。一つはノアは正しいであったと言われていたことです。6章でもそう言われましたが、7章1節でも主がそう言っておられました。これは信仰の結果、あるいは信仰の実りであることを先に申し上げました。ですから私たちはただ正しい行いそれ自体をするように心がければ良いということではありません。神を仰ぎ、神とともに歩む中で、その信仰から導かれる正しい行い、神に喜ばれる行いをして行くことが大切であるということです。私たちの信仰がそのような正しい行いに現れ出るものとなることを私たちは祈り求めたいと思います。

二つ目にノアは主を仰ぎ、すべて主の言われる通りに従いましたが、一方の主はどのようにするノアを助けてくださったということです。まさか動物が自ら雄と雌のペアで箱舟に入って来るとはノアとしても考えていなかったことだったのではないのでしょうか。しかし主に従うなら主が助けてくださいます。そのことを覚えて、主が命じておられることに対して人間的に「無理です！不可能です！できません！」と言うのではなく、主の助けを信じ、期待して主に従う道を進む者でありたいと思います。

三つ目にそのように神とともに歩む者を神が守ってくださるということです。上の水と下の水が地に襲い掛かり、箱舟が動き始めた時、ノアはどんな気持ちだったでしょう。それは決して遊覧船に乗っているような状態ではありません。激しい流れに翻弄される状態です。この世の終わりのような状態です。いつ舟が壊れ、水が浸入して

来るか、信仰なしでは気が気でない状態だったでしょう。しかし主が最も心配な部分をしっかりと閉じてノアたちを守ってくださいました。私達も主に従う歩みの中、大洪水の中に置かれるような時があるかもしれません。いつ壊れてすべてがダメになるかと思う時があるかもしれません。しかし主が後ろの戸を閉ざしてしっかり守っていただきます。その主に信頼して、主の御言葉に耳を傾け、主と共に歩む歩みへ、そして主の力によって守られ、大洪水をくぐり抜け、主が備えてくださっている救いに至らせていただく主の民の歩みへと導かれたいと思います。